

令和3年度 アドバイザリーボード 議事要旨

1. 日 時：令和4年2月22日（火）16:00～17:30
2. 場 所：日本医療研究開発機構 201 会議室・WEB併用開催
3. 出席者：
（委員）相澤委員、猪口委員、岡委員、岡田委員、ガテリエ委員、志鷹委員、藤原委員、三村委員、モイ委員、山口委員、湯澤委員、横野委員

（事務局）三島理事長、城理事、渡辺執行役、難波統括役、永井経営企画部長、橋本総務部長、藤本経理部長、岩本研究開発統括推進室長、松澤研究公正・業務推進部長、塩見実用化推進部長、野田国際戦略推進部長、丈達創薬事業部長、長谷医療機器・ヘルスケア事業部長、渡辺再生医療・細胞医療・遺伝子治療事業部長、水野ゲノム・データ基盤事業部長、岡田疾患基礎研究事業部長、宮川シーズ開発・研究基盤事業部長、丹藤革新基盤創成事業部長、浅野経営企画部次長 他
4. 議事
 1. 最近のAMEDにおける主な取組状況について（統合プロジェクト）
 2. AMEDの「社会共創」に関する取組の推進について
 3. 先進的研究開発戦略センター（SCARDA）に関する取組状況について
5. 議事の概要
事務局より開会する旨の発言があり、出席者の報告、三島理事長の挨拶の後、委員の互選によって藤原委員が議長に選任され、議事に入った。

【議事1. 最近のAMEDにおける主な取組状況について（統合プロジェクト）】

事務局より資料1を基に説明を行った。

委員からは、以下のようなコメントがあった。

- AMED-FLuXについて、企業との協業につながった事例も出ているとのこと
で、将来的な発展の方向性として、仮に企業との協業を検討するのであれば、ベンチャーキャピタル等にも参加いただくことで、企業との橋渡しに至らないシーズであっても、より幅広い視点から協業につなげることができ

るのではないか。

- 神経芽腫は再発したら難治であるため、ジヌツキシマブが承認されたことにより再発が防げるということは非常に朗報である。AMED にこのような研究課題への支援をいただき大変感謝している。
- 患者団体として AMED の研究発表会でパネル展示を行う等の機会を提供いただく中で、以前から非常によく声を聞いていただいていると実感している。可能であれば AMED における窓口を明示しておくとも患者としてもありがたいのではないか。
- 疾患基礎研究プロジェクトで開始しているアウトリーチ活動は今までにない大変すばらしい取組である。AMED こそがヘルスリテラシー等の分野で最先端の取組を実施しているため、このような活動は意義深いことであり、疾患基礎研究プロジェクト以外でもアウトリーチ活動を実施していただきたい。
- 医療機器開発支援ネットワークの相談件数を見ると、多数の企業が相談やコンサルタントを必要としているため、ぜひ事業を継続していただきたい。今後はコンサルを受けた側の満足度の確認や、その満足度に対して評価を行うことが考えられる。全国 80 か所に地域支援機関を設けているが、マッチングにおいては、コンサルを担当する側の経験やスキル等を踏まえる必要性があると思われるため、地域内で最適なコンサルがない場合は地域を越えたマッチングも考えられるのではないか。

【議事 2. AMED の「社会共創」に関する取組の推進について】

事務局より資料 2 を基に説明を行った。

委員からは、以下のようなコメントがあった。

- 新たに課を設置し、可視化された形で「社会共創」、ELSI や PPI の問題に取り組むことは非常に意義のあることだと思う。今後はぜひ PPI の前提としてのアウトリーチの活動により力を入れて取り組んでいただきたい。また、PPI に取り組むための基盤ないしは環境整備として、患者さん・市民の側への働きかけ・支援・啓発活動もぜひ行っていただきたい。ELSI に関しては「感染症研究開発 ELSI プログラム」は非常に短い期間に検討していただいたことに感謝申し上げたい。ELSI に関わる問題の中には、機動的あるいは非常に迅速な

対応が必要になる場合も起こり得るため、そのような対応を想定した体制の構築を検討いただきたい。

○ある高校では、女子生徒が理系の進路を選択することに対して、親御さんが反対し、理系の学生が増えにくい現状があると聞いた。AMED の役割として、国民に女性参画の必要性やどのような参画が必要かを説明する旗振り役として、ぜひ声を上げていただき、国民向けの男女共同参画の取組を実施していただきたい。

○PPI ガイドブックが完成したことで、次にどのようなステップに進むのか非常に期待している。また、患者代表として日本、アメリカ及びヨーロッパの学会等に参加する中で、海外では患者とアカデミア、行政及び製薬企業とは対等に話をする関係にあり、日本においても同様の関係を構築できるといえると思う。啓発活動だけでなく、参画を希望する患者のトレーニングにも貢献していただきたい。患者の育成等も患者代表から参考となる情報や意見等を出して、提案をしていきたいと思っている。

【議事 3. 先進的研究開発戦略センター (SCARDA) に関する取組状況について】

事務局より資料 3 を基に説明を行った。

委員からは、以下のようなコメントがあった。

○2021年6月のG7のサミットにおいて、日本はアジアで唯一、いわゆる100days missionの採択に合意した。来年、日本がG7の議長国となった際には具体的な取組や成果が説明できるよう、ぜひ、SCARDAについては、製薬協も全面的に協力し、チーム日本として、この重大なミッションに共に取組んでいきたい。

○迅速に国産ワクチンが開発できなかった原因の1つは、必要なところに予算が届いていないという状況にあったと考えている。予算の配分について、他の評価の方法も考慮いただき、既存の拠点の活用あるいは整備ももちろん非常に重要ではあるが、それ以上の枠組みをぜひ AMED として検討して欲しい。

○海外製のワクチンが莫大な研究開発費を投じ、グローバルに配給されていることから、SCARDA で開発した国産のワクチンが海外企業に勝つためには、海外への供給が必要ではないか。厚労省や経産省とも協力し、日本初の

ワクチンが完成した際には、アジア等の海外で使用されるようにならないとAMEDの取組があっても難しいのではないかと思う。

最後に、本日のアドバイザリーボードの議論を踏まえて、委員からは、以下のようなコメントがあった。

- 諸外国と比較して、日本の創薬分野への投資額は極めて少ない状況であると思わざるを得ない。資金配分のあり方について、広く配分していくのか、局所的に集中的に配分するのか、国家的な戦略が求められている。我が国の財政状況を踏まえると、今後、研究開発で世界と伍する成果を導出するためには、配分の絞り込みを行わないと厳しく、製薬メーカーにも投資を求めていく必要があるが、リスクヘッジのために安全な分野に偏る懸念があるため、AMEDがしっかりとコントロールをしていただきたい。
- 世界における日本のレベルは、研究論文等においても徐々に低下しており、日本初の優れた研究開発があまりされていないと思っている。AMEDにおいては、投資を集中させ、確実に世界に出していけるような研究開発を進めていただきたい。

以上をもって議事は終了し、議長より閉会する旨の発言があった。